



海城中学高等学校／生徒が主体的に参加するワークショップ形式の芸術鑑賞

# HAMLET Interactive 4.0

—— まっすぐ真剣に演じる姿が鑑賞する生徒たちの心を打つ ——

午後4時、授業を終えた生徒たちが続々と集まってくる。「やばい、セリフ覚えてない」「おまえ、そんなにセリフないじゃん。俺はバッチリだけど」「おまえみたいに、暇じゃないの!!」そんな軽口を叩きながら、台本を開く。

この日は初めての舞台稽古。セリフを覚えたり相手役と演技の確認をし合うなどしてから、セッティング作業が進む舞台に実際に上がり、舞台上での感覚を掴んだり、出るタイミングなどを確認する「場当たり」を一幕だけ行った。本番までは残すところあと2日。生徒たちの笑顔の中にも、どことなく緊張感が垣間見える。

海城中学高等学校が毎年、各学年ごとに行っている芸術鑑賞。高1では単に観るだけではなく、有志の生徒たちが集まり、自ら劇を演じるというユニークな取り組みが行われている。「ただ観て終わりではなく、生徒が主体的に参加するワークショップ形式にしようと考えた」と語るのは、芸術鑑賞委員を務める国語科主任の次重（じじゅう）文博教諭。中学で行っているドラマエデュケーションで交流のあった演出家の田野邦彦氏（RoMT／青年団演出部）の協力を得て、田野氏自らが演出、プロの劇団員も交えて生徒たちが演じるシェイクスピア劇の上演が昨年からは始まり、今年で2年目を迎える。

第1回目となった昨年は『ジュリアス・シーザー』を上演し、学内外で大きな評判を呼んだ。今年は『ハムレット』に挑戦することになり、出演希望の有志を募ったところ、最終的に生徒17名と教員2名が参加することになった。もちろん、誰もが本格的な演劇に取り組むのは初めて。『ハムレット』はプロでも演じるのが難しいとさえいわれているが、今回は主役のハムレット役を、対峙する相手「母親」「恋人」「友人」「大人」によって4人の生徒がそれぞれ演じ分ける4キャストで臨むことになった。本番までの準備期間はわずか1か月。出演メンバーは部活や勉強のスケジュールをやり繰りしながら放課後に集まり、田野氏や劇団員の指導のもと稽古を重ねていった。

母親相手のハムレットを演じる広瀬裕希君は、「セリフがない部分

の演技が難しい。どういう表情でやるか、試行錯誤している」、友人相手のハムレットを演じる佐々木知哉君は、「セリフを覚えるのが大変。毎晩、お風呂の中で覚えている」といい、「稽古を重ねるうちに、どんどん楽しくなってきた」と揃って笑顔を見せる。演じることの難しさを感じながらも、新鮮な体験を楽しんでいるようだ。

一方、指導に当たる劇団員は、「自分たちより台詞を覚えるのが速い」と舌を巻く。演出する田野氏も、「ハムレットはプロにとっても難しい劇のひとつ。高校生が演じることで、大人や社会との闘いや未来に向けてもがく姿がリアルに描き出され、私たちにとっても新鮮」と、真剣に挑む生徒たちの姿に驚きを隠さない。

そして迎えた舞台本番。1日目は午前と午後の2部に分かれ、高校1年生の全生徒が鑑賞する。開演と同時にビートの利いたラップが流れ、生徒が舞台上に登場。観客を一気に引き込んだ。ときに笑いも起こったが、冷ややかな嘲笑は一切ない。

「同級生のいつもとは違う表情や姿に驚いた。その裏にある努力を考えると、すごいと思った」「真剣に演じている友達の姿が、とてもかっこ良く見えた。今回は勇気がなくて参加しなかったが、次の機会があれば是非参加してみたい」

鑑賞後の生徒たちの感想には、そうした声が数多くあった。仲間が真剣に取り組む姿は、鑑賞した生徒の心にもしっかりと響いたようだ。

続いて2日目は、特別追加公演として一般にも公開。保護者や劇団員をはじめ多数が訪れ、生徒たちによるシェイクスピア劇「ハムレット」は大盛況のうちに幕を閉じた。2日間の舞台を終え、恋人相手のハムレット役を演じた中野陽君は、「1部を演じてみて、2部では最後の決闘シーンを変えた」、オトナ相手のハムレット役の深海貴君は、「観客の反応が良くてうれしかった。機会があれば、また演技をしてみたい」と語った。そう語る二人の清々しい表情の中に、「一生懸命やった」、「やり遂げた」という思いが浮かんでいた。

海城高校では来年もvol.3を予定している。生徒たちはどんな劇を見せてくれるのか。今から楽しみだ。

